

# 第4章 繰り返されるアイヌ差別

佐々木千夏 | 旭川大学短期大学部助教

## はじめに

本章では、白糠町をフィールドとしたアイヌの人々へのインタビュー調査と、地域住民へのインタビュー調査の結果<sup>1)</sup>を手がかりに、アイヌの人々の生活史に刻まれた被差別経験に注目していく。

まず、第1節では、これまでの分析方法と同様に（菊地 2013, 2014）、アイヌであることによる被差別経験の有無を量的に把握した上で、世代と性別の組み合わせによってどのようなエピソードが語られているのかを概観する（第1項）。次に、和人である人々の語りからもアイヌ差別の実態を把握する（第2項）。続く第2節では語りの内容にもとづき、学校内での差別について（第1項）、他の地域との比較について（第2項）、それぞれ語られている部分を参考にしながら白糠町に特有な差別の諸相を検討していく。最後に第3節にて、本章のまとめと考察を行う。

## 第1節 生活史における被差別経験

### 第1項 アイヌである人々の語りから

はじめに、白糠町調査において、アイヌとしての対象者全体にはどのくらい被差別経験があるのかを確認する。

差別の内容にかかわらず、対象者がこれまでの生活の中でアイヌであることを理由に差別されたりいじめられたりした経験があるという場合をカウントした結果<sup>2)</sup>、全体の86.5%が被差別経験「あり」に該当した（表4－1～2）。この結果は、これまでの調査地（新ひだか町、伊達市）と比べて最も高く、2つの地での全体の被差別経験率は順に50.0%、36.8%であった。つまり数値だけを見れば、白糠町ではアイヌへの民族差別が他の地域よりも多くあったのではないかと考えられる。

男女別に見た表4－1から、女性の場合、92.6%とほぼ全員に被差別経験があることがわかる。従来の調査でも、アイヌ男性よりアイヌ女性のほうが被差別の割合は高くなりがちであった。とはいえ、それでも今回の調査は飛びぬけて高い値である（新ひだか町アイヌ女性59.3%、伊達市アイヌ女性36.0%）。同時に、男性の被差別の経験率も白糠町では70.0%にのぼる（新ひだか町アイヌ男性40.0%、伊達市アイヌ男性38.5%）。男女ともに、従来の調査を大きく上回って被差別経験を持っていることがわかる。

こうした被差別経験率の高さは、表4－2の世代別にも顕著に表れている。従来の2つの調査では、青年層のうち20代にはまったく被差別経験がないことが共通しており、30代の経験率も2～3割程度と低く、全体の被差別経験率を押し下げていた。しかし、白糠町はこれまでとまったく異なる様相を示している。まず、どの世代にも被差別経験を持つ者が含まれており、しかも過半数を超える割合である。30代、40代、60代、70代以上に関しては全員が被差別経験保持者である。したがって、これまでのように主に女性の年配者に被差別経験が偏りがちであったのとは違って、

白糠町では幅広い世代から、そして多くの対象者から差別にまつわるエピソードがあがってきたということになる<sup>3)</sup>。

表4-1 被差別経験（男女別）

	あり	なし	合計	差別の経験率 (%)
男性	7	3	10	70.0
女性	25	2	27	92.6
計	32	5	37	86.5

表4-2 被差別経験（世代別）

	あり	なし	合計	差別の経験率 (%)
青年層	~20代	6	3	9
	30代	4	0	4
壮年層	40代	2	0	2
	50代	6	2	8
老年層	60代	9	0	9
	70代~	5	0	5
計	32	5	37	86.5

#### (1) 青年層×男性（5人中被差別経験者4人<以下、同様>）

では、世代ごとの具体的な語りに注目していこう。

白糠町における本調査では、青年層の男性のうち5人中4人、つまり1人を除いた全員がアイヌであることを理由とした被差別経験があると語っている。繰り返しになるが、青年層男性から被差別エピソードが語られたのは本調査が初めてのことである。

ある青年は、子どもの頃のアイヌ民族以外の人々とのかかわりを思い出す中で、「一番小学校の時が酷かった」「嫌な思いしかない」と語っている。とくに身体的特徴に対するからかいがあったという。

（アイヌの子弟かどうかが学校の中で判別されるものかという質問に対して）いや、もう、すぐわかる。どうしてもね。一番悪いのはね、身体検査とかあるしょ。女の子はどうかわからないけど、男の子はみんなパンツ一丁になるので、そしたら子どもでもやっぱり、ね。毛深いと「なんだアイヌ」みたいな。1回それあると、毎年（笑）。運動会も嫌だったしね。短パン半袖になるの。

このような毛深さへの指摘は、アイヌの人々が語るエピソードの中で典型的なものである。別の青年男性も、高校生になってから「とりあえず毛深いこと言われた」「そのことだけだね、言われたの。アイヌがどうこうとかは言われたことないわ」と振り返る。さらに別の青年男性も、小学校低学年の頃に、「いじめらししいいじめではないけど『お前、毛深いな』とか、そういうのがあった」といい、それを母親に話すと「そういう血が入っているからしょうがないんだ」と返された。ここにあげた事例からは、小学校から高校に至るどの段階でも身体的特徴へのからかいが起きていることがわかる。

また、恋愛や結婚の場面でもアイヌであることを理由につらい経験を持つ青年男性がいる。

むかし、付き合っていた彼女とけっこう長く続いてて、結婚というものも考えていたんですよ。でも、向こうの親にすごい反対されて、なんでだろうなと思ったら、よくよく聞いたら「あいつは、アイヌだからだめだ」って言われて。すごいショックを受けたことがある。(略) そう言われちゃつたんで、それからは、ちょっと踏み出せなくて(略)

この体験を経て彼は、「今まで、(アイヌだということを) 言われても『勝手に言ってれ』と思っていたけども、そのときは『なんで自分はアイヌで生まれたんだろう』と」思い悩んだ、と続ける。従来の研究でも、結婚時における民族差別は散見されてきたものの、若い男性から、こうした露骨な被差別経験が語られることはめったになかった。

これまでの研究の中で、アイヌへの民族差別が生じやすい場面は学校内、就職時、結婚時であることが繰り返し明らかになっている(野崎 2012; 菊地 2013など)。このうち、学校でのいじめおよび結婚時の差別がすでに青年層男性の語りから見出せたということになる。

## (2) 青年層×女性(8人中6人)

青年層の女性の場合はどうだろうか。若い世代でありながら、被差別経験を持つ者は8人中6人とやはり多数派となっている。

先に見た青年男性の事例と同じように、小学校での身体検査や運動会がからかいの機会になる様子は青年女性からも語られる。

身体検査に運動会、そういう時って肌見せるでしょう。そしたら、もう「何々さん、毛深いね、アイヌなんでしょう」とかさ、そういうのを言われたりとか、1回見られてるんだけどね、同級生にね。でも、ちっちゃい声でさ、何か陰口言われたりする。男子はもう言うしさ。(略) すごい嫌だった。夏もやだった。半袖、半パンでしょ。

語りの内容における「ちっちゃい声で」「陰口言われたりする」というのは女の子同士に特有ないじめの形態といってもよいだろう。別の女性も中学生の頃を振り返って、「単純に、トイレに入ったら『うわ、アイヌ臭する』みたいな」「いじめみたいのはあった、若干。」と語る。別の地域での調査でも、アイヌの人々に対する「臭い」といった言葉は把握されているため、差別に使われる言葉は地域を越えて共通しているといえる。

学生時代のつらい経験について、「乗り越えてはいないし、いまだに不安になる」と回想する青年女性は以下のように語る。

友だちは普通にいたんだけど、男子とかそういう女の子の間でも悪いグループとか影のグループとかにはよく、「触ったらアイヌが移るから触らないでくれ」とか、あとなんていうの、給食当番とかあるじゃないですか。給食当番やるときに「お前やるな」って言われて、「何で?」って言ったら「お前がやったら毛が入るべや」とか言われたりとか。アイヌっていう名前ことで毛深いっていうふうに言われたり、汚いとか不潔とか、そういうイメージがすごく子どもたちの中であって、ずっとそれでアイヌだっていうことを、毛深いって言われて、私、自殺未遂何度したかわからない

くらいだったんですよ。

学校の給食当番のような日常的な場面でも差別が起きていたという現実は、決して軽視されるべきではない。こうした記憶のトラウマを抱えながら生きているアイヌの人々がいるかぎり、年長世代から年少世代へとアイヌへの蔑称が引き継がれている現実をどうすべきか、改めて考えていく必要がある。

上記の女性は、小学校の低学年から祖母と一緒にアイヌの踊りにかかわっていた。そのため、かなり早くからアイヌであることを自覚していたというが、アイヌの血筋であるにもかかわらずそれを認識せず、アイヌ差別にかかわっていた人もいたようである。

アイヌの人でもそういうふうにアイヌということを馬鹿にする人もいたからさ。でも、その人は自分がアイヌとわかっていないんだよ。だって親とかがそういうこと（注：踊りなど）をしているわけではないから。（略）実際問題、自分はアイヌじゃないと思っていた人もいるみたいよ。ただ、親たちの年代というか、親をたどっていけばわかるじゃない。それで、あそこの子どももアイヌなんだよと。あいつは、人のことをアイヌと言うけれども、あいつらだってアイヌだと。

以上の語りからは、彼女への差別が和人からだけでなく、アイヌの血筋である者からによる民族内差別であった可能性がうかがえる<sup>4)</sup>。踊り等を通じてアイヌであることを表現する者に差別が起き、表現をしない場合には差別が起きないどころか、差別する側にもなり得るのであれば、差別の構造はより丁寧に捉えていかなければならない。

青年層女性の被差別経験の事例は学校でのいじめに偏っており、就職時や結婚時のエピソードは見られなかった。これは、従来の傾向とまた異なる部分である。しかしいずれにしても、性別を問わず、青年層から学校での民族差別の様子を多くうかがえたということは、白糠町では比較的最近まで学校の中でアイヌ差別が起きていたと考えられる。この点は後ほどまた改めて注目したい。

### （3）壮年層×男性（5人中3人）

青年層よりはやや割合が落ちるが、壮年層の男性も半分以上が被差別経験を持っている。

「いじめじゃないけども差別はあった」。「あった、すごかった」と語る1人目の男性は、修学旅行で阿寒に行った際、「そこで皆に」「おおアイヌだアイヌだって」「なんか自分に言われてるのかと思う」ことがあった。この男性は「殴られたとか、皆に無視される」のを「いじめ」と考えており、そういった「いじめ」の経験はないものの、アイヌであることを指摘されるような蔑視があつたと記憶している。ただし、彼は中学校時代を振り返って「楽しかった」と述べており、差別はあまり深刻な悩みとして語られてはいない。

2人目の男性は、学生時代に「あ、犬」（アイヌ）などの「言葉はよくありました」と語る。さらに、学卒後に自身がアイヌであることを意識し始め、「ちょっと目線を感じたりとかして」、「20歳くらいになると、人がたくさんいる町に行くのは嫌でした」と語る。この点について、東北と北海道の違いを以下のようにも語っている。

自分ね、東日本、東北の震災で、電信柱の、N T Tの復興工事行ったときに、1年間で。宮城にいたんですけど、すごいあれでしたよ。逆に「あれ、外国人かい？」というような感じで言われたんですけど、「北海道です」って言ったらすぐに理解してくれて、それからすごい仲良くなりましたよ。意外と、北海道の人の方が偏見の目が強いなと思って。

彼の実感では、北海道にいる時のほうが偏見の目を強く感じている<sup>5)</sup>。こうした見た目に対する偏見をふまえ、彼は、「多少なりに嫌な思いをしたので、少しは苦労させたくないと思って」、結婚の際には和人の配偶者がよいと望んでいた。

3人目の男性も小学校時代に「アイヌ」と言われた経験を持つ。ただし彼は、アイヌと馬鹿にされると「返り討ち」にしていたという。周りには言われっぱなしになっているアイヌの子弟もいたが、自分は反抗していたのでそうなることはなかったという。

以上のように、壮年層男性からもやはり学校での被差別経験が多く寄せられる。ちなみに、壮年層男性の5人中2人は被差別経験「なし」に該当するが、そのうちの1人は差別された経験は「とくにない」と言い切るもの、話の中では「ちょっとした喧嘩になると、そういう言葉（「アイヌ」など）が出てきましたね」と語っている。このように、本人が差別と考えていなくとも、内容だけ見れば被差別とも取れる経験を持つ者は存在しているので、実際にはさらに多くの差別が起こっていると考えてよいだろう。

#### (4) 壮年層×女性（5人中5人）

壮年層の女性は、5人すべてが被差別経験を持っている。

その傾向として、学生時代のいじめはほぼ全員が経験しているが、結婚時のエピソードが増える印象がある。ある女性は、学生時代に上級生から「アイヌ、アイヌ」と言われたことはあったものの、卒業後は自分がアイヌであることを一時期忘れていたことすらあった。

小学生の時に、その上級生がいなくなつてからそんなことなくなつたし。結婚しようと思った時まで忘れている存在だったよね。いざ結婚というときに、アイヌって言われて、名前で呼んでくれなくて、メノコメノコって言ったから。その話を聞いてから「ああ、私はアイヌだったんだっていうふうに。」（聞き手：そのときにまた、ふと思い出して…）そうです。「まだこういう人が残っているんだな」って不思議に思った。

別の女性も、結婚の際に相手の親から反対された。現在は「アイヌだからって」「馬鹿にされるようなふうに思われないように、頑張って生きたい」と語る彼女は、そう思ったきっかけを以下のように語る。

結婚に反対された時ですね。相手の、亡くなった旦那の親から。やっぱりトラウマみたいになっちゃって。それがあるせいか、真向かいにいても、馬鹿にされたくないって頭が先にいて、絶対に頑張って生きていかなきゃならないっていうのが、子どもを育てる上にしても、そうやって。

こうした結婚をきっかけとした差別に苦しむアイヌ女性の姿は、従来の調査でも多く把握されてきた（小野寺 2012 など）。

さらに、壮年層の女性の語りには、仕事の場でのエピソードも目立ってくる。上記の結婚に反対されてトラウマになったと語る女性は、ある交通関係の会社で車掌をしていた。その際、上司が彼女を他の人に伝えるときには名前ではなく、「アイヌの女人の人」と呼んでいたという。また、以下のような経験を語る。

後から来た運転手さんがいたんですよね。その人が結婚式を挙げることになって、そのハガキを回す役目をやっていたんですよね。そうしたら、運転手さんがたの発起人会で、私がハガキを回しているのにかかわらず、呼ばれていなかった。なぜ呼ばないんだって、発起人会長の人が運転手さんに、私のほうが先輩でしょ。後輩の運転手さんに聞いたら「アイヌだから呼べない」って。（略）そこまで差別するのかなって、あのときはびっくり。そのときは21歳くらいの時かな。あれにはびっくりした。そこまでしなきゃならないのか。なんでハガキを手で回させたのかなって。

彼女に業務を分担させておきながら、アイヌであることを理由に結婚式には呼ばないというあからさまな民族差別である。こうした職場での出来事や、結婚時にも差別された経験をふまえ、現在彼女はアイヌとして「頑張って生きたい」と述べているのである。

別の女性も、スナックで働いていた際、体毛を気にしていた。

だってスカート履きたくないのにさ、強制されるわけでしょ、ホステスさんやるんなら。スリットが入ってなきゃだめとか。だけど、ああ、こうしないと、仕事できないんならしゃあないなと思って。すごく嫌だなと思って。

彼女がこのように体毛を気にするのは、離別した夫から言われた「男と（一緒に）いるみたい」という言葉が尾を引いていたからである。また別の場面で、親戚に「ひげ生えてんでねえのか」と言わされたこともあった。

ああまたかと思った。男の人ってそういうとこ見るのは。気持ちじゃないんだな、外見でまず判断してるんだなと、ひげ生やしてたわけでないよ、わざとそやって言ってたんだなと思った。

（略）いやらしいよ、そういうのって。それだらはっきりお前アイヌかって言われた方が、まだ気楽かなと思うよ。体の特徴から言われてくるの、すごくなんか、いじめに近いものあるんじゃないと思って。

こうしたエピソードに接すると、女性にとって体毛を指摘する差別は非常に酷なもので、しこりとなって彼女たちの心に残るものだと想像できる。差別の内容に度合いを付けることは困難だが、身体的特徴の指摘よりも「はっきりお前アイヌかって言われた方が、まだ気楽かな」という彼女の意見も解釈の1つとして重要だろう。

アイヌ民族内での外見の差について述べる女性もいる。彼女は、「学生時代に苦労したこと、つ

らかったことはあるか」という質問に対して、明確に「いじめ」と回答している。当時、「アイヌの血が混じっているはずなのに、いじめる側に」なっているアイヌの子弟もいた。

そのいじめの中にちょっとだけアイヌの血が入った人も混ざってやられたから。その人はなんていうの、普通の人に顔も近くて、綺麗な人。顔も濃くなくて。私たちは毛深いし、私も女性だったけど私も濃かったから、もう1人の一緒になってやった子は綺麗なの。色も白くて毛も全然生えてなかった。でも、そういう血は流れている。

(略)私はあの人とは違うのよって、それをパフォーマンスっていうか、その方に行って一緒にやつたっていうことは、自分は違うよっていう感じでしょ。

以上に語られる光景は、アイヌの血を引く者同士の民族内差別である。血の濃さによる「序列」が子どもたちの中で作られてしまうということもまた、学校で起きているいじめの一形態である。

壮年層の女性になると、被差別のエピソードが具体的であり、そのぶん、彼女たちの苦しみもまた鮮明に浮かび上がってくる。実際の名前ではなく「メノコ」や「アイヌの女人の人」と呼ばれるなど、アイヌ女性に特有な被差別が見て取れた。従来の調査では、外見に対する差別に心を痛め、その後の人生において積極的になれない女性の様子を報告したが（菊地 2012）、本調査では、度重なる差別をふまえて「頑張って生きたい」と語る女性の姿が印象的であった。

#### (5) 老年層×女性 (14人中14人)

最後に、老年層の女性に注目する。壮年層の女性と同様、老年層の女性も14人全員が被差別経験を語っている。

学生時代の「あ、犬」や「アイヌ、アイヌ」といった言葉による囁き立ては8人から、仲間外れにされた経験は2人から、体毛の指摘は2人から共通して述べられた。子どもの頃の記憶で、どこかの家の壁に「アイヌ」と落書きされた光景を覚えている者もいた。やはり年長の世代では、学校でのアイヌへのいじめや偏見はかなりあったようである。

こうした差別には、家庭の経済状況の影響も見られる。対照的な2つの事例を紹介したい。まず、少数派ではあるが、学生時代にいじめはなかったと語る老年女性である。

小さい頃は全然、なんかすごくいじめのあった白糠なんだけど、私はいじめられなかったのね。それは絶対に、お金があったせいだと思う、親が。皆貧しい暮らしをしてた時に、ちょっとお金持ちの親方の娘だったから、いじめはなかった。

彼女の出生家族には経済力があったため、いじめはなかったと考えている。現在60代の彼女が小学生だった頃、学校の中で貯金の積み立てがなされていたことがあった。

白糠って、小さい時から、今はどうか分かんないけど、学校貯金ってあって、月1回、先生にね、組合の貯金の通帳持つて、何か、今日は貯金の日ですよみたいな日があったんだよね。(略)それを持ってくる子と持つてかない子がはっきりしてたのも、きっとアイヌだったと思う。アイヌの子は

そんなお金ないから並べないんだよね。

以上のような学校の光景は現代では考えられないことだけれども、家庭の貧困が否応なく可視化されてしまう場面となろう。

他方、貧しい家庭の生まれだという女性は、小学校4年生の時、和人の男性教諭がこの女性だけにクレヨンを買ってくれたというエピソードを語る。

(その先生は) アイヌに関して理解があるかどうかわからなかつたんだけど、要するにうちが貧しくて、アイヌ、アイヌって馬鹿にされたりさ、私、意外と今こうだけど、昔は無口でものもありしゃべらなかつたんだけど、わかってたんじゃない? 私をいつも見てて、すぐ近くで。で、クレヨン買ってくれて、絵描いて。それが一番うれしかつたね。

以上のように、アイヌ民族であり、なおかつ家庭が貧困である場合には差別が起きやすいという状況は、従来の調査でも明らかとなっている<sup>6)</sup>。1人目の裕福な家庭で育つたと語る女性の事例から、アイヌであっても豊かな家庭で育つ子弟の場合には、民族差別が起きにくくともわかる。それぞれの家庭の経済状況が見えやすくなってしまう学校において、差別が重複しやすいという現実がある。

老年層の女性の場合、就職時や職場での被差別エピソードも多い。面接の際に差別を感じたという女性は、ある職場での仕事が終わり、それまで一緒に働いていた友人と別の職場の就職面接を受けに行った。

一緒に阿寒で働いていた友達と面接行つたらさ、私が落ちるんだよね。顔見たらあれでしょ? そういう差別は受けてきたけどね。(略) 面接行つたら、相手が受かって私がさ。そういう差別は、私がアイヌだからかなーと思って。べつにそれをどうのこうの恨むわけじゃないけど。自分がそういう民族なんだからさ。差別されても仕方ないなーとは思ってるけどね。

別の老年女性は、和人が多い職場で公務員をしていた際、「無知な職員(和人)」がアイヌに対して「とんでもない質問をする」ため、「腹立った」と語る。

アイヌの人たちはどうだった、昔どうだったとかそういうね、くだらない質問をする人がいるんですよ、いっぱい、シサムの、シャモのね、職員が。(略) アイヌの日本人としてね、人間として変わりないんだっていうことをね、説明してやつた、その人に(笑)。だからね、あんたたち、何わかってここに働いてんのと思って。

上記からは、「無知」が引き起こす差別の様子が見て取れる。これまで概観してきた身体的特徴を指摘するものや、アイヌへの蔑称を口に出すような差別も、「無知」、つまりアイヌ民族への理解のなさが要因の1つになっていることができよう。

関西地方で働いた経験を持つ女性は、ある地域での経験を以下のように語る。

私がアイヌ民族だっていうことを「お前は何者だ？」って聞かれたんですよ。一緒に働く仲間に。だから「北海道から来たアイヌだ」と。そしたら○○（地域名）の人は、はじめは部落民か？（略）みたいな、そんなようなことを言われて、思ったって。またその部落民のことを私はよくわからなかつたので。そしたらその部落民の人が寮にいたんですよね。その人は廊下でも、すごい隅のほうを歩くんですよね。なんか、私の中学校時代の廊下歩いている時の、そんな姿に似てるなって。

（聞き手：○○の方々は？）アイヌはね、何も蔑視しませんでした。かえってね、「サインをくれ」って言われるぐらいのね、アイヌであるということが「すごいな」って。逆に言われましたね。

以上の語りから、この地域では同和問題があると予想されるが、アイヌ民族に対する偏見の目はなかったことがわかる。先の東北より北海道のほうが強く差別的まなざしを感じるという壮年男性の事例を含めると、アイヌの人々への民族差別は道内を中心に起こりやすいといえるだろう。

老年層女性のエピソードはさらに続く。学校、職場に引き続き、結婚に関する被差別経験を抱える事例も少なくない。まず、あからさまに配偶者の家族から差別を受けてきたという女性の語りである。

私がどうして最初の旦那さんと結婚したかというと、自分がアイヌで生まれて差別を受けて嫌な思いをしたから、子どもにはそういう思いをさせたくないと思って、シサムの旦那さんを選んだけど、旦那さんはよくても周りが結局は理解してくれなくて、買い物にも行っちゃダメだ、銭湯にも行っちゃダメだ、というそういう差別を受けてね。

前半の語りには、この女性が配偶者には和人を選びたかったという希望がうかがえるが、こうした希望はアイヌの男性ばかりでなく女性も同様に持つものだということがわかる。この女性は銭湯に行くことを許されず、「そこの家のお風呂に入る時に、家族全員12人入った後に私が入れられ」、「垢が浮いて汚い風呂に毎度入らせられていた」。さらに、日常の中でも「その辺をうろちょろ歩いたら困るとか、近所で不幸があって手伝いに行こうすると『あんたは行かなくていい』って。要するに私はアイヌだからそういうところに出るなっていう」差別を、「姑や本家の嫁」つまり身内の女性たちから受けてきた。男性たちからは目立った差別はなかったという。

次に、配偶者からの差別を受けてきたという女性である。和人である同級生と結婚した彼女は、夫婦喧嘩の時に言われた「メノコ」という言葉が離婚の原因になったという。

喧嘩しているうちに、メノコって言われたの。1回も言わされたことない言葉なのに、旦那にメノコって言われたってなって、実家に帰ったらさ、帰れって言われたんだよね（笑）。そのぐらいの言葉言われたぐらいで帰ってきたらね、あれだって、歩いて泣きながら帰るんだよね。それが今度癖みたいになって、合計4回言わたんだよね。これはだめだと、年取ったら、もっとひどくなるだろう、この人は。（略）

このように和人の配偶者からアイヌであることを言われ、場合によっては離婚に至るようなケースも決して珍しくはない。結婚してから家庭の中で起きるアイヌへの差別は、アイヌ男性に対する

ものではなくアイヌ女性に対するものが圧倒的に目立つ。

これまで見てきた学校内、就職時、結婚時だけではなく、老年層の女性からは多様なエピソードも目に付く。それらは主として体毛を気にする内容に集約されており、たとえば、釧路の銭湯にて公衆の洗い場で剃毛する女性がいるのに驚き、アイヌ民族の多い白糠では考えられないと語る女性がいた。また、「人より毛深い」ことがアイヌ女性の「一番の悩みの種」という女性は、病院への受診や、入院することに戸惑いを覚えるという。「『あっ、この人、どっか違うな』って、絶対そういう目で見る」、「必ず振り返って見たり、黙って見たりする」という眼差しの差別をこれまでの生活の中ですっと感じてきたといい、「若い頃はやっぱり嫌だった」と述べている。

老年層の女性の語りには、あからさまな民族差別から、民族内差別、眼差しの差別の経験まで、幅広いエピソードが集まっている。就職時や結婚時のエピソードが増え、しかも具体的になってくることから、やはりアイヌであることでの差別を被り、悩み苦しんできたのは男性よりも女性に多いといってよいのではないか。

## 第2項 和人である人々の語りから

では続いて、白糠町の住民調査のデータを参照して、和人である人々からはどのような差別につわる内容が語られているのかを見していく。

### (1) アイヌの人々に対する眼差し

はじめに、幅広い世代からアイヌの人々に対する見方がうかがえた。

20代和人女性は、「お酒を飲んだらすぐ人に絡んだり」、「現に、周りというか、町内でもそうですが、ちょっと気性が荒い」人が目に付くと述べる。お祭りなどの飲酒可能な公共の場でも、「けっこう絡む…人が多い。絡んでいるのを見る」という。こうした酒癖の悪さが若い世代から語られるのは、やはり白糠だからこそというべきであろうか。しかし一方で、別の20代和人女性は、アイヌ民族に対して、「白糠ではそんな感じは…冷視してないと思う」と述べている。また別の、30代の和人男性は「白糠に来るまで」「アイヌっていう言葉自体知らなかった」といい、小学校低学年の頃、「あいつはアイヌだよ」というのを耳にした。とはいえ、学校の中でいじめがあったわけではないという。若い世代だけでも、様々な見方が存在している。

60代の和人女性は昭和40年代に、比較的近くの町から白糠町に嫁いできた。当時、白糠には風貌からアイヌとわかる人が多かったと振り返り、「ちょっと怖いな」と思ったことはあった。

体格だとか、やっぱりひげだとか。毛深いですよね。私たち、あんまりそういうの見慣れてないから「ああ、この人アイヌなんだ」とかって。だから、本当はそういう人種差別っちゅうかね、そういうのはいけないことなんだなあってはわかってるんだけども、やっぱり見た目で、ちょっと一歩バックしてしまうっちゅうか、やっぱりアイヌの人がわかんなかった頃は。して、自分でここに嫁いで、あっちこっちで働いたり、そういう出会いがあったりして、お付き合いしてみれば、何も…（略）

以上のような偏見は「アイヌの人がわかんなかった頃」ということなので、「無知」が引き起こ

している偏見といえるだろう。

過去には、和人がアイヌの人を騙すような差別があったと語る者もいる。

アイヌに金貸してね、和人っていうのは利子を取るでしょ？ だけどアイヌっていうのは、借りたものはいつまでたっても元のまま返せばいいという考えだから、お互いに物々交換っていうそういう考えだからね、利子なんていう事はやっぱり頭にはないんですよね。だから店なんかへ行って、焼酎の事をアイヌ殺しっていうんですよ。(略) アイヌの人っていうのは酒っていうのは元々あれだけ、あれ強い酒だからね、本当にヘロヘロになっちゃうんですよね。腰抜けるし。それでもって証文書かせたり、約束取り付けて、取り上げるっていう和人がいたんだと思いますよ。(70代和人男性)

こうした語りを見ると、過去には白糠町の中でアイヌへのあからさまな差別があったのではないかと想像される。ただし、この男性は、現在でも見た目からアイヌの人々を判別することはできるけれども、だからといって現代には和人からアイヌへの差別はないと言っている。

すでに成人した子どもを持つ世代は、身内がアイヌ民族を配偶者に選ぶことに関して、難しい思いを抱える者もいる。

僕の姪っ子が結婚した血筋にアイヌの人がいて結婚すると聞いた時に、「誰と？」と、頭によぎるのがそれなんだよね。きっと僕らの年代ですよ、今の人はどうかわからないけど。それはきっと、だからって反対とかどうのこうのではなくて、頭の中に一番それが気になる部分。でもそれは口に出して「本家筋はアイヌだろう」とかそこまで露骨に言うことはないと思うけど、どこかでみんな我々の年代以上の人たちはとくとくにそれを感じるのかもわからないですね。(60代和人男性)

(娘の結婚という文脈の中で)わが事として考えたらどうなんだろう。やっぱり美しいことは言つていられないんじゃないかな。なぜなんだろうっていうことは言うかもしれないよね。でも徹底的に反対はもうどうしようもないと思うよね。最後は許すと思うけど、やっぱり紆余曲折はあるんじゃないかなという気はするよね。冷静に物は見れないかもしれない。(60代和人男性)

以上のようなアイヌとの結婚に難色を示したり、露骨に嫌がったりする様子は、従来の調査でも何度か見られた(小野寺 2012; 菊地 2013)。こうして見えてくると、アイヌの人々に対する漠然とした偏見や差別の眼差しはこれまでの調査地と同様、白糠町でも把握でき、特徴としては年長世代だけでなく、年少世代からもあがってきていることを指摘できる。

## (2) 学校教員によるアイヌ差別

和人のデータを見ていく中で、学校がアイヌ差別の温床となっているのではないかと思われるものが3件あった。まず、60代の和人男性は以下のように語る。

小学校4年生の時に、担任の先生がアイヌのことを、これは侮蔑だなあ。笑わすんだよね。「ア

イヌの屁臭いな。1里行っても臭い。2里行っても臭い。3里行って、鼻の頭を見たら糞（くそ）がついていた」と、そういう話をするんだ。ただ大人の人が差別だね。「あの、メノコどうしている？」とかいう、その「メノコ」というのが何なのかわからなかった。それはあったね。（聞き手：では、まあ先生とか大人の人たちがアイヌの方を侮蔑するような…）いじめとか差別というのは親が言うから、大人が言うから子どもが受け継ぐのさ。

語りの最後に、「大人が言うから子どもが受け継ぐ」とあるが、親ばかりでなく、学校の教員が言い伝えてしまっては、差別は広範囲に受け継がれ、浸透しかねない。

別の60代和人男性は、小さな頃から同級生にアイヌの子弟がおり、子どもたちの間では差別もなく暮らしてきた。しかし、小学校1、2年生の頃に、みんなの前でアイヌの子弟が教台の上に座らされたことが忘れられず、ずっと疑問を感じていた。その子がどんな悪いことをしたのかまったく記憶にないため、「あの時の先生もある程度、何かばかにしてたんだろう」と回想する。

結局何ていうか、アイヌの人たちよりも自分たちが、何て言つたらいいのか簡単にいえば上だと思ってる？ 半分アイヌの人たちばかにしている？ そういうきらいがあるんじゃないですかね、風潮がね。（略）昭和36年ぐらいの話なんで、学校の先生らなおさらそういう風潮があったんでないですかね。あの頃学校の先生ったら「ははあ」っていうぐらい偉かったから。（上記の60代和人男性）

最後に、自分自身が教員であったという80代男性である。以下、3つの語りの内容から、彼自身にアイヌ民族に対する偏見があったようにも読み取れる。

- ・ その頃ね、子どもたちもね、一番困るのは座席替えさ。子ども達に「座席替えしてくれ」って言うでしょ。替える時ね、アイヌの子と一緒にさせるとね。だって昔は、両袖の机だから。ひとつひとつでないから。どうしても、座席替えしたら、2人組になっちゃうわけさ。そうするとね、その頃のアイヌの人達ね、体臭がまだあるわけさ。それからもうひとつはね、その頃は、不潔な生活。低レベルな生活だったから、それで、においがするからいやだって。それから、肌の色が違う。そういうので、子ども達がいやがったね。
- ・ やっぱり、銭湯に行ったらね、言ったら悪いけどね、ふわっと、動物が入って来たみたいな感じ。毛深くてね、ふわーって背中なんて。女の子ね、夏でも、長い靴下、ソックスっていうの。
- ・ あの人達も投げやりなところはあったけどね、親もね。「どうせ私達、アイヌだから」って、そういうね。俺も家庭訪問まわってね。お茶を出してくるのにね、あっちのほうから急須、鉄板の急須、拾ってきて、こっちから蓋持つて来て、お茶淹れて、湯のみ茶碗にお茶出してくれるでしょ。飲めって言ったって、飲めないもんね。

上記の中には、アイヌの人たちには体臭がある、拾ってきた急須でお茶を出すといった貧困ゆえにアイヌの子弟が陥っていた状況への差別と、肌の色が違う、毛深いといった身体的特徴に対する偏見が混在している。いずれにしても、教員がこうした意識を持っている以上、子どもたちにアイ

ヌへの差別的な眼差しが受け継がれていくことは否めない。彼は、席替えの時に嫌がる子どもに対して、「ちゃんと風呂に入ってこい」と、「自分も努力しなきゃだめなんだから、きれいにちゃんとしなさいよって。隣の女の子には『差別しないでね、同じなんだよ』」と声をかけた。どちらかというとアイヌの子弟の側に清潔にするための指導をしたことになる。教員として、アイヌ民族について学ぶことはあったかという質問には、「なんもしない。悪い風習だけど、中身を突っ込んでいかないほうがいいっていう時代だった」と語る。

以上から、和人の教員によるアイヌ民族への偏見はこの地域に強かったのではないかと予想されるものの、直前の事例は80代のため、今ほどアイヌと和人の混血が進んでおらず、戦後まもない衛生面も不十分な時代の様子である。しかしこれまでの検討を振り返ると、アイヌの青年層からも学校での被差別経験が多く寄せられていたため、次節ではまず、改めて学校で起きている民族差別に目を向け、さらに検討を深めたい。その上で、白糠町の特徴をより明確につかむために、地域差にまつわるエピソードに注目していく。

## 第2節 若年層に見られる民族差別

### 第1項 学校の日常に刻まれたアイヌ差別

学校内で民族差別が起こるとき、教員がどのような態度を取るのかは1つの鍵となるだろう。そもそも、アイヌ集住地域である白糠町において、学校の中でアイヌの事柄がどのように取り上げられているのかも差別と無関係ではない。

学校でアイヌの踊りを披露することになったという場面を語る、2人の青年男性の事例を参照したい。1人目の男性は当時を振り返り、「見世物にされた」という。

忘れもしないんだけどね、小学校の2年生ぐらいの時だったかな。それこそ白糠の保存会で婆ちゃんにくつ付いて踊り踊ったりっていうのを先生に言って、(略)ある日ね、先生がクラスの前で「じゃあ○○(青年の名前)その踊りやってみろ」っていうことになって。「やだよ」って。して「何で」って「できないんなら、じゃあいいわ」ぐらいの感じなの。わかる? あれ。「じゃあ、いいわ、いいわ」みたいな、何かちょっとイラッとするあれ、あの感じで言われて。俺はもう、やったって何にも伝わるもんじゃねえと思ったから、ばかにされて終わりだなと思ったから。そして歌もないのに踊れつていきなり言われて。

彼は歌が用意されないまま、結局は踊りを披露し、「案の定ばかにされた」と続ける。そして「あの屈辱は忘れない」と言葉を結ぶのである。

他方、踊りを披露することによって別の効果があったと語る青年男性もいる。彼は、日ごろからアイヌであることをからかわれ、いじめに遭っていた。それを親に伝えたところ、親は教員に連絡し、彼の祖母もまた校長室まで出向いて抗議したという。そうした経緯をふまえ、ある日の朝礼で祖母たちがアイヌの民族衣装を着て急に登場してくることがあった。

学校で踊ったんだ。学校のステージの上で。したっけ、みんな踊った後に、今度マイクで「○○○○君、上がってきてください」って。「へ?」と思って。それで俺も踊ったんだわ、弓の舞ね。

弓の舞、踊ってからはなんも。それこそ一切言ってこなくなつた。逆に「すごいね、よく踊ったね」みたいな。

2人目の彼の場合は、踊りを披露することでいじめが一切なくなった。当時は「恥ずかしいんだか緊張してるんだか、もうパニクッちゃって」、「汗ダックダク」の経験だったとはいえ、「すごいね」ということは「いまだに言われてる」ということである。2人目の青年の場合は、母親や祖母の意見も相まって功を奏したといえるかもしれないが、1人目の青年のように、そうしたサポートがなく、アイヌ文化を表現するのに十分な準備がなされていない場合は、教員の一聲が「屈辱」の経験として残る可能性もある。

以上の事例は若い世代のものであり、ここ20年以内の出来事である。

同じように、若い世代の様子がその母親から語られている。ある壮年層のアイヌ女性は、「息子が小学生の時に、うちの親戚の子がアイヌっていじめられて、学校で問題になった」ことを語っている。

そういうのがきっかけで、出前講座をやるようになったんですよ。アイヌとは、こういうものなんだよって。うちらが子どもの時はそういうことが一切なかったけど、いま学校で年に何回か協会のほうで、何人か行って、子どもたちに「アイヌとはこういうものだよ」ということで、アイヌという意識を変えてあげないと。言ってる方も、「アイヌってなんだ」と思って、「アイヌ、アイヌ」って言っていると思うんですよね。

こうした取り組みはまさに、アイヌに関する「無知」が引き起こしている差別をなくすための積極的な内実を持っているといえる<sup>7)</sup>。

別の壮年層のアイヌ女性は、白糠に住んでいた中学校時代まで、学校内で差別を受けていたというが、卒業後、アイヌのことを勉強するために阿寒湖のほうに移り住んでからはそのようなことはなかった。阿寒の地で結婚、出産をし、息子は彼女（母親）とは反対に中学生期までを阿寒で過ごし、高校から1人で白糠に出てきた。そのとき、当時10代の息子が「初めて差別された」という。

息子は一人暮らしをしていたんですけど、2年生になってから息子のところに一緒に暮らすようになって、掃除をしていたら見つけたのが、差別のいろいろなことを書かれた色紙をもらったみたいで、その色紙を見つけて初めてそういうことがあったんだなというのがわかって、校長先生に言いに行つたんです。そのときに初めてわかった。本人は何も言わなかつたです、私には。

学校側は、「とんでもないことをしたという感じで、校長先生はすごく真剣に取り組んでくれた」という。「やつた子どもたちに対して謝罪するようにさせたりとか、一生懸命やってくれ」たとのことで、高校の対応には信頼がおけるものの、実際に現代でも子どもたちの間でアイヌ差別が起きているということを確認できる。

現在の学校や教員の対応に高い関心を持つ母親もいる。青年層の彼女は第1節でアイヌであるこ

とをからかわれ、学生時代に自殺未遂を何度もしたかわからぬと語った女性であり、現在、小学生以下の子ども2人の母親である。彼女は言う。

- ・家庭訪問のときに、先生が今の息子の先生が〇歳ですごい若い先生なんだけど、「アイヌって知っていますか?」って言ったっけ、「僕まだ勉強不足で」って。勉強不足な先生とかも結構これからいる。
- ・「(略) 私の時にはいじめとかそういうこと正直あったんだけど、今そういう時代も変わった、そういうのはなくなったって聞いてるからほっとしてるんですけど。もしそういうことがあった時に、私はいつも学校にまで見に行っているわけでもないから、もしアイヌだとかなんだとかでいじめがあったら、先生ちゃんと言ってくださいね」って言ったら、「わかりました」って。
- ・先生たちも結構変わるじゃないですか。転勤だの、新しく来た、校長先生も教頭先生も変わっていくから。時代が時代で昔からいる学校の先生って今あまりいないから。どういうふうに変わつて、今アイヌってどういうふうに見られているのかっていうのは逆に私もどうなってるんだろうって気になる感じかな。

以上の語りには、教員にアイヌのことを学んでほしいという期待と、いじめが起こった時の対応への期待が表れている。アイヌ集住地域に着任する教員にはその地域の歴史を学んでほしいと願うのは当然であり、やはり教員の側も、地域の特性や歴史に積極的に向き合っていく必要があるだろう。

加えて、保育所にて保育士から「毛深さ」を指摘されたという女性もいる。

保育園の先生にうちのお母さんが呼ばれて、「お母さん、この子、ちょっと様子がおかしいんですよ」って。どうしたんですかと聞くと、「すごい毛深いんです。病院に行った方が良いんじゃないですか」って先生にお母さんは言われたって。(略) そういうことを知らない人もいるんだ。なんか、大丈夫かなと思うね、そういう人は。先生なんだよ。保育園の先生だよ。そういう人も中にはいるよね。(青年層アイヌ女性)

上記の事例にも、やはり「無知」が関係しているのは明白である。彼女は、母親は笑い話として「わざとでそういうふうに言っているわけでもないし」、「わからないでそういうふうに言う人もいる」と話したと言うけれども、やはり集団保育に携わる立場として「無知」で済む問題でもないだろう。したがって、小学校以上の教員ばかりでなく、保育士や幼稚園教諭のような子どもにかかる職に就く者すべてがアイヌというエスニシティを学ぶ機会を持つべきであろう。

## 第2項 白糠町に特有なアイヌ差別

これまでの検討で、明らかに従来対象とした地域よりも民族差別が頻発していると感じられる白糠町だが、この地域に特徴的な差別の様相はあるだろうか。

まず、少なくとも白糠町において差別が多いという実感は、他の地域と比較する中で語られることが多かった。たとえば前項では、阿寒湖では差別を感じなかつたけれども白糠ではあったという壮年層女性の語りを見た。彼女は以下のようにも述べる。

やっぱり白糠にいたらアイヌが下に見られる中で、阿寒湖はアイヌ民族を売りとしていると言つたらおかしいけど、そういう観光地だから、やっぱり自分でいられるというか、恥ずかしがらないでいられる場所でしたね。

こうした地域比較の語りは、他にも存在する。釧路に生まれ、中学校から白糠に引っ越してきたという老年層の女性は、当時のエピソードを詳しく述べている。

白糠中学校行つたっけね。「釧路からアイヌが引っ越してきた」って。白糠にもいっぱいいるのにさ（笑）。私さ、釧路にいたとき、小学校も中学校も1回もそんな風にばかにされたこと、言われたこと1回もないのに。（略）学校の夏休み、先生方も来てもらって、「ちょっと、私白糠に行つたら、こやつて言われた」って言つたらみんな泣いてね、したっけね、「そんな白糠の中学校なんか行くな、釧路に帰つてこい！」ってみんな逆に泣いてね。だから田舎なんだよね。本当に。びっくりしたもん。

また、和人の30代男性からも以下のような語りがあった。

- ・（聞き手：白糠のほうは、差別というのはあった。）俺はそういうふうに感じるよね。こっちのほうが、意識が強いっていうの？
- ・（聞き手：「釧路とは違うな」と感じるのは、どんな時に感じますかね。）どんな時…どんな時。その生活の中で、そこまで意識はないかもしれないけど、ちょっとしたことで「俺はアイヌだから」とか「あいつはアイヌだから」とか、そういう言葉を聞くかな。

以上の3人の語りは、別の地域と比べて白糠町のほうがより差別を感じやすいという点では共通しているものの、それ以上に白糠町に特有のものを見出すのは難しい。1人目の女性は、阿寒湖のほうが白糠よりもアイヌの表象が盛んであり、ポジティブに受け入れられているにもかかわらず、白糠ではそうではないために「アイヌが下に見られる」と判断する。2人目の女性は白糠が釧路よりも「田舎」であることが差別を強めているとみている。3人目の男性は、白糠が釧路よりもアイヌであることに対する「意識が強い」ため、差別に関する意識も強いと感じている。1人目と3人目の語りは対照的であり、両者をふまえると、アイヌとしての意識が高いことは差別を強めることにも弱めることにもどちらにも作用すると解釈することができる。ただ、いずれにしても他の地域より白糠町の方が差別は感じない、あるいは白糠町も他の地域も差別についてあまり違いはないといった語りは1人として見られず、白糠町のほうが差別を感じるというエピソードだけが把握できたということは、他の地域よりも白糠町は差別が多い地域だと結論づけてよいだろう。

### 第3節　まとめと考察

以上、白糠町におけるアイヌ差別の諸相を検討してきた。本調査では何よりもまず、これまでの調査地よりも、アイヌの人々が述べる被差別経験の多さが特徴としてある。その内実はこれまでと同様に、男性よりも女性のほうが差別の経験率や内容ともにより深刻ではあったけれども、男性ア

イヌが抱える被差別経験も決して少なくなく、とくに青年層の男性に被差別経験が見られたのは白糠町においてのみであった。従来の調査では、年長世代になるほど、そして男性よりも女性のほうがアイヌであることによる差別を受けやすい傾向にあったものの、白糠町では、若い層にも多く被差別経験が見られたことによって、①白糠町という地域にアイヌへの民族差別が根強い可能性と、②過去ばかりでなく、近年でもアイヌ差別が残存している可能性の2点を結論としてあげたい。

なぜ、白糠町においてこの2点が浮上してきたのかは、以下、推測の域を出ない。

たとえば、ある対象者が白糠町は「田舎」だから差別が多いと述べていたが、本章で繰り返し比較していた新ひだか町、伊達市よりも白糠町の人口規模が小さいのは事実である。小さなアイヌ集落において、年長世代から年少世代への継承も含みつつ、アイヌへの民族差別が日常化している可能性はある。

被差別のエピソードを振り返ると、「アイヌ、アイヌ」といった囁き立てが学校の中でとくに珍しくもなく起きており、あるいはまったく逆に、アイヌに対する「無知」さがアイヌの人々を傷つけてしまう行為となる様子も語られることが多かった。こうした実態だけみれば、白糠町はわりとオープンに差別的な言葉が飛び交いやすい地域といえるかもしれない。その際、学校の中で起きるアイヌ差別の語りが多く、その対策として白糠アイヌ文化保存会による学校への「出前講座」がなされていることもわかっている。このように、差別を予防するための活動が行われていること自体、差別を含めアイヌ文化そのものの継承が途切れつつある地域とは様相を異にしているというのが白糠町の特徴といえるだろう。

同じ北海道内でも、地域によってアイヌへの偏見やあからさまな差別に程度の違いがあるのは明らかであり、白糠町においては比較的「見えやすい」民族差別にどのような対処をしていったらよいのか、「出前講座」以外の方法も模索される必要があるだろう。

### 注

- 1) アイヌ民族として調査対象になったのは48人であるが、このうちアイヌの血を引く者が37人おり、和人妻／和人夫としての立場が8人、夫婦ともに和人だが配偶者がアイヌの養父母を持つ立場が2人、配偶者はアイヌであり本人の血筋は不明が1人含まれている。したがって、アイヌとしての被差別経験を把握する際、アイヌの血筋ではない11名を除いている。また、白糠町住民調査の対象者は25人である。
- 2) このとき、被差別エピソードとして捉えられる内容が語られても、本人が差別された経験は「ない」と語っている場合、被差別経験は「なし」に分類している。
- 3) ただし、アイヌとして対象になった老年層の男性4人の中には、実際にはアイヌの血筋の者がおらず、3人は和人、1人は血筋が不明と判断されたため、以下の分析でも老年層のアイヌ男性は登場しない。
- 4) しかし、アイヌであることの自認がなされていない者からのアイヌへの差別を民族内差別と見なしてよいものかどうか、論点にはなるだろう。
- 5) こうした道内と道外での意識の差について、道外では差別を気にせずにアイヌであることをイベント等で表現できたけれども、道内では差別を気にして萎縮してしまうという事例が別の調査地でもあった。詳しくは菊地（2012：148－149）参照。

- 6) さらに、アイヌと朝鮮籍の親を持つ血筋の場合にはなおのこと差別が重複して起こる様子も明らかにされている。
- 7) なお、本調査のアイヌとしての対象者の中に、出前講座で講義を担当しているという老年層の女性が含まれていた。彼女のインタビューの中では「差別はダメだよ、罪だよ」、「その差別を受けて死ぬ人もいるんだよ。そういうことを言っちゃダメだよ」という語りがあった。また、小さい頃の差別やいじめの経験を元に話しているということである。

## 参考文献

- 菊地千夏, 2012, 「アイヌの人々への差別の諸相——生活史に刻まれた差別の実態」 小内透編著『北海道アイヌ民族生活実態調査報告 その2 現代アイヌの生活の歩みと意識の変容——2009年北海道アイヌ民族生活実態調査報告書——』 北海道大学アイヌ・先住民研究センター, 143–156.
- , 2013, 「アイヌ差別の諸相——民族差別と民族内差別」 小内透編著『調査と社会理論・研究報告書30 新ひだか町におけるアイヌ民族の現状と地域住民』 北海道大学大学院教育学研究院教育社会学研究室, 38–50.
- , 2014, 「アイヌであることと被差別経験」 小内透編著『調査と社会理論・研究報告書31 伊達市におけるアイヌ民族の現状と地域住民』 北海道大学大学院教育学研究院教育社会学研究室, 116–130.
- 野崎剛毅, 2012, 「階層形成過程と階層分化の要因——階層形成過程としての生活史」 小内透編著『北海道アイヌ民族生活実態調査報告 その2 現代アイヌの生活の歩みと意識の変容——2009年北海道アイヌ民族生活実態調査報告書——』 北海道大学アイヌ・先住民研究センター, 95–108.
- 小野寺理佳, 2012, 「アイヌとジェンダー」 小内透編著『北海道アイヌ民族生活実態調査報告 その2 現代アイヌの生活の歩みと意識の変容——2009年北海道アイヌ民族生活実態調査報告書——』 北海道大学アイヌ・先住民研究センター, 61–93.

(佐々木千夏)